

文タイプとの呼応からみた係り結びの衰退

衣畑智秀

tkinuhata@cis.fukuoka-u.ac.jp

福岡大学/ワシントン大学

係り結びと格の通方言的・通時の研究

@オンライン

2020年9月19日

係り結びの定義

形態的定義

文中の助詞に呼応して文末述語の活用形が変化する（大槻 1897; 船城 1987）。

- (1) a. 小萩がうへぞ静心なき（源氏・桐壺）
b. 命長くとこそ思ひ念ぜめ（源氏・桐壺）

意味的定義（広義）

文中の助詞が文の「陳述」に影響を与えて文を終止させる（山田 1936）。

- (2) 鳥は飛ぶときに羽をこんなふうにする。

意味的定義（狭義）

文中の助詞に呼応してその文のタイプが決まる（Kinuhata 2015; 衣畑 2016a,b, 2019）。

1 イントロ

2 宮古諸方言の係り結び

3 古代日本語の係り結び

4 なぜ3系列を媒介に衰退するのか？

5 まとめ

平安時代の「係り結び」（狭義意味的）

ゾ（・ナム・コソ）が用いられれば平叙文

- (3) ただ女宮一ところをぞ持ちたてまつりたまへりける。（源氏・宿木）

ヤが用いられれば肯否疑問文

- (4) その姉君は朝臣の弟妹やもたる？（源氏・帚木）

カが用いられれば疑問詞疑問文

- (5) などか御子をだに持たまへるまじき？（源氏・濡標）

平安時代には文タイプとの対応も、活用形との呼応もある（Kinuhata 2015）。

「係り結び」の定義と適用範囲

古代日本語の「係り結び」は形態的定義にも（狭義）意味的定義にも当てはまる。

琉球諸語を見ると、取り上げる方言によってどちらかの定義を取る必要がある。

- ▶ 形態的定義：北琉球諸方言, 八重山諸方言
- ▶ 意味的定義：北琉球諸方言, 宮古諸方言

宮古西里方言（衣畑 2016a）

- (6) a. *kjuu=ja irau=nkai iki ks-tai.*
今日=TOP 伊良部=ALL 行く 来る-PST
- b. *kjuu=ja irau=nkai=**du** iki ks-tai.*
今日=TOP 伊良部=ALL=FOC 行く 来る-PST
「今日は伊良部に行ってきた。」
- c. *kjuu=ja ndza=nkai=**ga** iki ks-tai?*
今日=TOP どこ=ALL=FOC.Q 行く 来る-PST
「今日はどこに行ってきた？」

意味的定義と係り助詞の分布

=*ga/du* は「統語的島」の中には入れない（伊良部島伊良部）。

- (7) a. [*ndza=nkai pii*] *pitu=nu=**ga** jamaʔasa-ha-taa?*
どこ=ALL 行く人=NOM=FOC.Q 多い-ACOP-PST
「どこに行く人が多かったの？」
- b. **[ndza=nkai=**ga** pii] pitu=nu jamaʔasa-ha-taa?*

=*ga* は「主要部後置」の原則によって、文タイプを決めるために文末に移動する。

- (8) a. [*s*[*NP ndza=nkai pii pitu*]=*nu=**ga** jamaʔasa-ha-taa*]
↑
- b. **[s*[*NP ndza=nkai=**ga** pii pitu*]=*nu jamaʔasa-ha-taa*]
↑

以下、これ以外に「係り結び」を文タイプとの呼応と見ることによって、明らかとなる歴史変化を考える。

1 イントロ

2 宮古諸方言の係り結び

3 古代日本語の係り結び

4 なぜ3系列を媒介に衰退するのか？

5 まとめ

3つの文タイプを区別（3系列）

伊良部島伊良部

- (9) a. *pisara=nkai=**du** ittisi t-taa.*
平良=ALL=FOC 行く 来る-PST
「平良に行ってきた。」 平叙文
- b. *pisara=nkai=**ru** ittisi t-taa?*
平良=ALL=FOC 行く 来る-PST
「平良に行ってきたの？」 肯否疑問文
- c. *ndza=nkai=**ga** ittisi t-taa?*
どこ=ALL=FOC 行く 来る-PST
「どこに行ってきたの？」 疑問詞疑問文

ほか、佐和田、長浜（伊良部島）、新里（旧上野村）など

2つの文タイプを区別 (2系列)

上地 (旧下地町)

- (10) a. $mma=ga=du$ soodzi-si-taa.
 祖母=NOM=FOC 掃除-する-PST
 「祖母が掃除をした。」
- b. $mma=ga=du$ soodzi-si-taa?
 祖母=NOM=FOC 掃除-する-PST
 「祖母が掃除をしたの？」
- c. $ndza=nkai=ga$ iki u-taa=ga?
 どこ=ALL=FOC.Q 行く RES-PST=Q
 「どこに行っているの？」

平叙文

肯否疑問文

疑問詞疑問文

ほか、与那覇、洲鎌 (旧下地町)、野原 (旧上野村)、荷川取、下崎、松原

文タイプを区別しない体系 (1系列)

狩俣

- (11) a. $obaa=ga=du$ soodzi asi=dai.
 おばあ=NOM=Foc 掃除 する=Past
 「おばあが掃除をしたよ。」
- b. $vva=a=du$ soodzi asi=tai?
 2SG=NOM=FOC 掃除 する-PST
 「あなたが掃除したの？」
- c. $ndza=ngi=du$ asubi ifu=tai?
 どこ=LOC=FOC 遊ぶ 行く-PST
 「どこに遊びに行ってたの？」

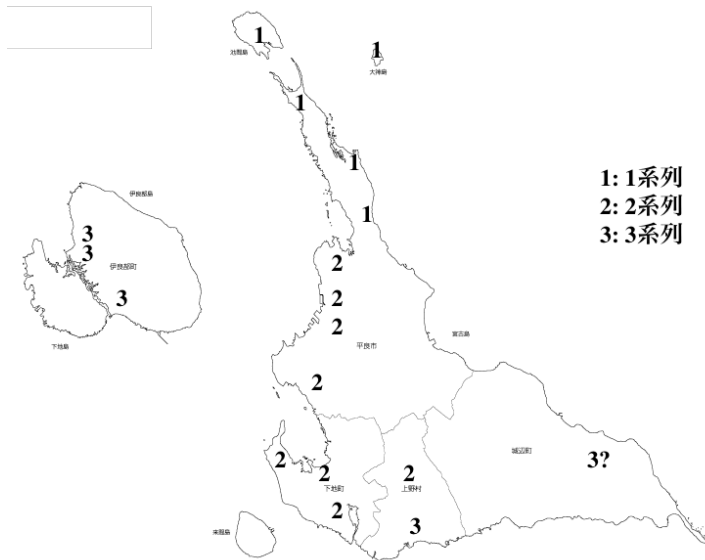
平叙文

肯否疑問文

疑問詞疑問文

ほか、大神、島尻、大浦、池間諸方言

地理的分布 (参考)



3系列から2系列へ: 宮古西里方言

柴田 (1976) によると、西里方言では平叙文に $=du$ 、肯否疑問文に $=nu$ 、疑問詞疑問文に $=ga$ がそれぞれ係り助詞として用いられていた。

しかし、衣畑が2014年に調査 (1932年生、女性3名) したところ、

- (12) a. $obaa=ga=du$ soodzi-si-taa.
 祖母=NOM=FOC soodzi-する-PST=Q
 「おばあが掃除した。」
- b. $obaa=ga=du$ soodzi-si-taa=na?
 祖母=NOM=FOC soodzi-する-PST=Q
 「おばあが掃除したの？」
- c. $ndza=nkai=ga$ iki u-ta=rjaa?
 どこ=ALL=FOC.Q 行く RES-PST=Q
 「どこに行ってたの？」

平叙文

肯否疑問文

疑問詞疑問文

3系列から2系列への合流は、新城方言でも起きている。

系列の歴史変化について

系列の合流が起きているなら、変化は

「3系列 > 2系列 > 1系列」。

=gaの係り結びが北琉球に広く分布する*こと(内間 1985)が、2系列から1系列への合流を支持。

しかし一方で、肯否疑問専用の係り結びは、管見の限り北琉球にも南琉球にも(宮古を除いて)見られない。

肯否疑問専用の係り助詞の多様性(伊良部=*ru*、西里=*nu*、新里=*na*)は、それが宮古諸方言で発生した可能性を示唆する。

*ただし、宮古諸方言と異なり、自問に限り用いられる。

祖語に再建される*2系列

肯否疑問文の係り助詞が類推で説明できるなら、変化は

「*2系列 > 3系列 > 2系列 > 1系列」

*2系列はどのような対立か？

(疑問詞／肯否) 疑問文=*ga* vs 平叙文=*du*の可能性

- ▶ 北琉球諸方言(内間 1985)
田皆、国頭(沖永良部島)、渡久地、瀬底、小湾、那覇、饒波(沖繩本島)、儀間(久米島)
- ▶ contra. 奄美大島(名瀬: 上村・須山 1997、湯湾: Niinaga 2010)

=*ru*、=*nu*、=*na*の由来

伊良部の=*ru*

- ▶ ヒント: =*du* と =*ru* は北琉球に地理的分布として見られる(内間 1985)。

★ 平叙文の係り助詞が:

=*du*の地域: 奄美大島、徳之島、沖永良部島(=奄美諸方言?)

=*ru*の地域: 沖繩本島、伊是名島、久米島(=沖繩諸方言?)

- ☞ =*du* > =*ru* への変化が、文タイプの相違として起こったか。

西里の=*nu*

- ▶ ヒント: 伊良部方言では=*ru*が鼻音に同化する。

(13) *pisara=n=nu ittsi bu-taa?*

「平良に行ってたの？」

(伊良部島伊良部)

- ☞ 鼻音に同化した=*nu*が一般化したか。

新里の=*na*

- ▶ ヒント: 琉球諸方言には肯否疑問文を表す終助詞 *na(:)* が広く分布
- ▶ 終助詞 *na(:)* に類推したか。

(14) *vva=ga=na saudzi si-taa=na?*

「あなたが掃除したの？」

(新里)

宮古3系列方言における*2系列の証拠

伊良部島伊良部

埋め込み疑問節では=*ga*/*ru* vs =*du*の対立

疑問詞疑問節において、

- ▶ 埋め込み節の答えを話し手が知らない場合は=*ga*、
- ▶ 埋め込み節の答えを話し手が知っている場合は=*du* (衣畑 2016b)

(15) a. *a=baa mma=ʔa noo=ju=ga jummi bui=gara ssa-n.*
1SG=TOP 祖母=NOM what=ACC=FOC.Q read PROG=Q know-NEG

「私はおばあが何を読んでいるか知らない。」

b. *a=baa mma=ʔa noo=ju=du jummi bui=tii=ja*
1SG=TOP grandma=NOM what=ACC=FOC read PROG=QUOT=TOP
sizzi=du bui.

know=FOC RES

「私はおばあが何を読んでいるか知っている。」

宮古3系列方言における*2系列の証拠 (続き)

肯否疑問節においても同様

- (16) a. **a=baa** Nakamasan=ga unten=nu asi=**ru** si=ru
 1SG=TOP 仲間さん=NOM 運転=ACC する=FOC.Q する=Q
 asi-n=nu **ssa-n.**
 する-NEG=Q know-NEG
 「私は仲間さんが運転できるか知らない。」
- b. **a=baa** Nakamasan=ga unten=nu asi=**du** si=tii=ja
 1SG=TOP 仲間さん=NOM 運転=ACC する=FOC する=QUOT=TOP
sizzi=du bui
 know=FOC RES
 「私は仲間さんが運転できるか知っている。」

- ☞ 疑問節の答えを話し手が知らない場合は=**ga**/**ru**、
- ☞ 疑問節の答えを話し手が知っている場合は=**du**

祖語の疑問文 (*=**ga**) vs 平叙文 (*=**du**) の対立を反映しているか。

宮古2系列方言に*2系列の証拠は見られない

上地 (旧下地町)

(主節：疑問疑問文=**ga** vs 肯否疑問文・平叙文=**du**)

- (17) a. **ba=ja** too=**ga=ga** soodzi si-taa=**gara ssa-n.**
 1SG=TOP 誰=NOM=FOC.Q 掃除 する-PST=Q 知る-NEG
 「私は誰が掃除したか知らない。」
- b. **ba=ja** too=**ga=ga** soodzi si-taa kutu=**uba ssi=du**
 1SG=TOP 誰=NOM=FOC.Q 掃除 する-PST こと=ACC.TOP 知る=FOC
uu.
 RES
 「私は誰が掃除したか知っている。」

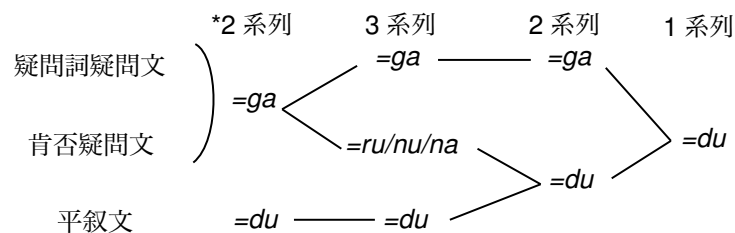
疑問詞が使われれば=**ga**が使われるように固定化している。
 疑問詞疑問節における=**ga**と=**du**の交替は3系列の方言(の一部)にだけ見られる。
 疑問文と平叙文が対立することを表せる3系列が、*2系列から引き継いだ特徴か。

まとめ

宮古語の係り結びは、以下のように変化した。

「*2系列 > 3系列 > 2系列 > 1系列」

2系列が疑問文=**ga** vs 平叙文*=**du**だったとすると、



- ☞ 係り助詞と文タイプとの対応は、**3系列を媒介に**不均衡(肯否疑問文と平叙文が=**du**!)・消滅へと向かった。

1 イントロ

2 宮古諸方言の係り結び

3 古代日本語の係り結び

4 なぜ3系列を媒介に衰退するのか?

5 まとめ

平安時代にはカ：疑問詞疑問文、ヤ：肯否疑問文、ゾ：平叙文の対応があった（イントロ）。

その前の奈良時代を見ると、カは疑問詞疑問文にも肯否疑問文にも用いられている（詳しい解釈は衣畑 2014a）。

(18) いづくにか（可）船泊てすらむ 安礼の崎漕ぎ廻み行きし 棚なし 小船（万葉 58） 疑問詞疑問文

(19) 群鳥の朝立ち去なば 後れたる我や（也） 悲しき 旅に行く君 かも（可母） 恋ひむ（万葉 4008） 肯否疑問文

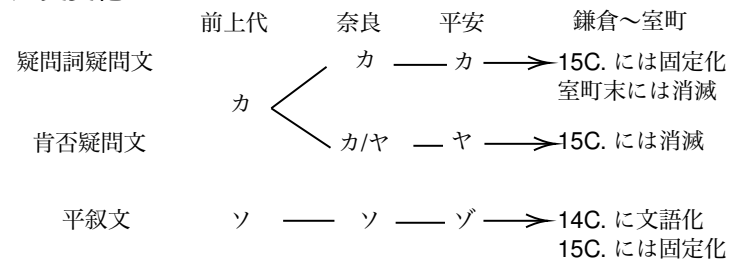
(20) 春されば木末隠りてうぐひすそ（曾） 鳴きて去ぬなる（万葉 827） 平叙文

▶ 肯否疑問文においてヤとカが競合している。

ヤは後から疑問を表すようになった。

- ▶ 「か」が疑問の意に多く用ゐられ、「や」が詠嘆乃至反語の意に用ゐられた事は、記紀の用例に見ても明かであるが、... 時代と共にこの「か」と「や」との区別が混用せられ、もと「か」の用ゐられたところへも「や」が用ゐられるやうになつた。」（澤瀉 1941: 177）
- ▶ 「次に私は「や」の本義を推測してみたい。疑問の助詞といはれるのは、恐らくは転用であるまいか。... 疑問の意味を帯びるようになったのが更に進んで係詞として「か」と勢力を争ふに至つたのではあるまいか。」（佐伯 1963: 51）
- ▶ 「上代以前と言える時代に、連体形結びの係り結びは、本来「カ、ソ」による「疑問、断定」型の体制であった。ここに何らかの事情で、「カ」に近いところのある「ヤ」が「カ」のあるべき場所に侵入した。」（野村 2001: 11）

歴史変化



- ▶ 「前上代」は疑問文カ vs 平叙文ソの*2 系列
- ▶ 奈良時代以前に肯否疑問文のヤが発生
- ▶ 平安時代のカ、ヤ、ゾの **3 系列を媒介**にして、衰退・消滅へ。(cf. 野村 2005; 衣畑 2014b)

なぜ 3 系列を経て衰退へむかうのか？

なぜ 3 系列に分かれる際に肯否疑問文が分離されるのか？

1. イントロ

2. 宮古諸方言の係り結び

3. 古代日本語の係り結び

4. なぜ 3 系列を媒介に衰退するのか？

5. まとめ

焦点と文タイプ

焦点 談話上想定される疑問詞疑問 (wh-questions) の疑問詞の位置に対応する部分[†]

- ▶ 疑問詞疑問文は疑問詞によって**焦点**が明白。
- ▶ 肯否疑問文と平叙文は文脈がないと**焦点**は分からない。

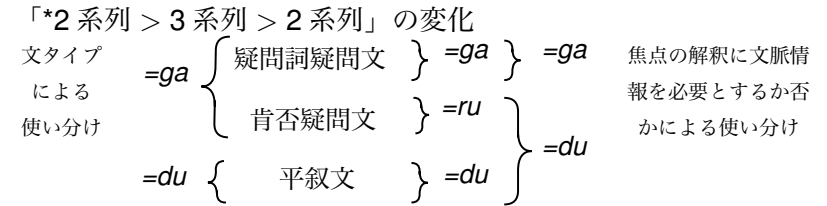
(21) a. 宣長は [紐鏡で]_F or [係り結びについて]_F or [書いた]_F の？
b. 宣長は [紐鏡で]_F or [係り結びについて]_F or [書いた]_F。

(22) a. 宣長は紐鏡で [何を]_F 書いたの？
b. 宣長は紐鏡で [係り結びについて]_F 書いたの？
c. 宣長は紐鏡で [係り結びについて]_F 書いた。

(23) a. 宣長は [どの本で]_F 係り結びについて書いたの？
b. 宣長は [紐鏡で]_F 係り結びについて書いたの？
c. 宣長は [紐鏡で]_F 係り結びについて書いた。

[†]Roberts (2012)。Krifka (2006) の焦点の他の用法 (「訂正と確認」「並行性の表示」「話題の限定」) はここから説明可能。

3系列を経る意味



肯否疑問文は、疑問詞疑問文とも平叙文とも共通項を持つ。

肯否疑問文を新しい形式で疑問詞疑問文から分離する (3系列にする) ことによって、焦点標識の=duの一般化を助けている。

- ▶ =gaは疑問詞があれば用いられる、とも解釈される (衣畑 2016b: 4.1.3)。
- ▶ =duは焦点の位置を示しているだけで、文タイプとの呼応はない。
- ▶ 焦点を示すという機能が重視されれば、宮古島北部諸方言 (池間、狩俣、大神、島尻、大浦) のように、単なる焦点標識として (=duが) 発達する。
- ▶ 焦点の機能がなくなれば、日本語のように、助詞そのものが衰退・消滅する。

1 イントロ

2 宮古諸方言の係り結び

3 古代日本語の係り結び

4 なぜ3系列を媒介に衰退するのか？

5 まとめ

本発表の要点

宮古諸方言の「係り結び」には、3つの文タイプを区別する方言 (3系列)、2つの文タイプを区別する方言 (2系列)、文タイプの区別をしない (つまり係り結びはない) 方言 (1系列) がある。

これらは「3系列 > 2系列 > 1系列」と係り助詞が合流したと見られるが、それ以前には疑問文と平叙文を区別する*2系列が想定される。古代日本語も元は疑問文と平叙文を区別する*2系列であったと想定される。

宮古諸方言も古代日本語も、肯否疑問文と呼応する係り助詞 (=ru/nu/na、ヤ) を創出し、3系列へ移行した後、係り結びが衰退している。

3系列の対立は、焦点の解釈に文脈情報を必要とするか否かによる2系列の対立へ移行しやすく、文タイプとの呼応 (=係り結び) が失われやすい。

REFERENCES I

- Kinuhata, Tomohide (2015) "Kakarimusubi as a device to determine the sentence type," in *International Workshop: Kakarimusubi from a Comparative Perspective*, NINJAL, 9.
- Krifka, Manfred (2006) "Basic notions of information structure," in Féry, Caroline, Gisbert Fanselow, and Manfred Krifka eds. *The notion of information structure*: Universitätsverlag Potsdam, pp. 13–55.
- Niinaga, Yuto (2010) "Yuwan (Amami Ryukyuan)," in Shimoji, Michinori and Thomas Pellard eds. *An introduction to Ryukyuan languages*: Research institute for languages and cultures of Asia and Africa, pp. 35-88.
- Roberts, Craig (2012) "Information Structure: Towards an integrated formal theory of pragmatics," *Semantics and Pragmatics*, Vol. 5, No. 0, pp. 6:1-69, DOI: 10.3765/sp.5.6.
- 上村幸雄・須山名保子 (1997) 「奄美方言」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』, 三省堂, 431-459 頁.
- 内間直仁 (1985) 「係り結びのかかりの弱まり—琉球方言の係り結びを中心に—」, 『沖縄文化研究』, 第 11 巻, 223–244 頁.
- 大槻文彦 (1897) 『広日本文典・同別記』, (勉誠社より 1980 年に復刻).
- 澤瀉久孝 (1941) 「「か」より「や」への推移」, 『万葉の作品と時代』, 岩波書店, 115-183 頁.
- 衣畑智秀 (2014a) 「上代から中世の疑問文の様相—データ解釈を中心に—」, 『福岡大学人文論叢』, 第 46 巻, 第 1 号, 57–95 頁, 6 月.
- (2014b) 「日本語疑問文の歴史変化—上代から中世—」, 青木博史・小柳智一・高山善行 (編) 『日本語文法史研究 2』, ひつじ書房, 61–80 頁.

REFERENCES II

- (2016a) 「係り結びと不定構文—宮古語を中心に—」, 『日本語の研究』, 第 12 巻, 第 1 号, 1–17 頁, 1 月.
- (2016b) 「南琉球宮古語の疑問詞疑問係り結び—伊良部集落方言を中心に—」, 『言語研究』, 第 149 巻, 19–42 頁, 3 月.
- (2019) 「係り結び」, 木部暢子 (編) 『明解方言学辞典』, 三省堂, xx–xx 頁.
- 佐伯梅友 (1963) 「万葉集の助詞二種」, 『萬葉語研究』, 有朋堂, 40–61 頁.
- 柴田武 (1976) 「沖縄県平良市方言の付属語 du および nu, ga について」, 佐藤喜代治教授退官記念国語学論集刊行会 (編) 『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』, 桜楓社, 39–60 頁.
- 野村剛史 (2001) 「ヤによる係り結びの展開」, 『国語国文』, 第 70 巻, 第 1 号, 1-34 頁.
- (2005) 「中古係り結びの変容」, 『国語と国文学』, 第 82 巻, 第 11 号, 36–46 頁.
- 船城俊太郎 (1987) 「係り結び」, 山口明穂編 (編) 『国文法講座 3 文法古典解釈と文法』, 明治書院, 287–306 頁.
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』, 宝文館.